

Drayton のソネットの変質

加藤 芳子

I

ソネットという詩型がイタリアに生れて、これが Wyatt や Surrey 等によって英国に移入されて以来というもの、この詩型は次第に流行するようになり、英国の Renaissance 期に於ては、いわゆる sonnet sequence として、様々な詩人達によって起用されるに至っている。¹ 例えば、Spenser の *Amoretti*, Sidney の *Astrophel and Stella*, Daniel の *Delia*, Drayton の *Ideas Mirrour. Amours* 及び *Idea*,² そして Shakespeare の *The Sonnets* 等である。しかし、Drayton のソネットに関する研究は、PMLA の *Bibliography*³ で見る限り、St. Clair⁴ と R. Tuve⁵ による 2 篇位しか見当たらないのである。まして日本では、かなり未開拓な分野であると言えよう。⁶

Drayton はまず、*Ideas Mirrour. Amours* を 1594 年に出版し、次にこれに様々な修正・削除・追加挿入を施して、1599 年には *Idea* と表題も変えて出版している。そしてこの修正作業はその後も続いており、主に、この 1599 年と 1600 年、1605 年、1619 年の計 4 段階に大別できるのであるが、この間に彼のソネットには、形而上詩的傾向が目立つようになってきているのである。

本稿では、この *Amours* が修正を受けて、数版にわたる *Idea* へ変わっていく過程を辿り、この詩集の変質のみならず、その作者 Drayton の修正の意図、更には、彼自身の人生観及び文学観の変化（成長と言えるかもしれない）を明確にしたいと思う。

II

1594 年版 *Amours* の世界は、まさに大陸的なものであり、Ovidian or Petrarchan conceit が随所に見られる。⁷ 詩人の恋人である女性⁸ の神聖視と、彼女に対する詩人の盲目的な崇拜の念、詩人自身の恋心の神聖視、恋愛そのものの神聖視、そして、

実らぬ恋に対する詩人の嘆きと溜息と涙——これらの特徴は、いわゆる Petrarch の love sonnet の世界以外の何物でもない。しかも、1594 年版 *Amours* というこのソネット集に登場している image は、Tuve 女史の、いわゆる Aristotle の、“ten categories”⁹ 中の、“substance” や “quality” などという、tenor (本義) と vehicle (喩義) との間の距離が極めて近いものの、単なる amplification にすぎないのである。¹⁰ そしてこれこそ、Tuve 女史が Elizabethan poetry の特徴としているものなのである。

ところが、修正・削除・追加という過程をへて、1599 年以降数版を重ねる *Idea* に於ては、これらの特徴はかなり薄れており、その image の構想上の論理の拠点も、“relation,” “place,” “manner of doing” その他の、tenor と vehicle との間の距離が遠いものが目立つようになり、これらが有機的に結びついて、緊密なソネット構造を持つものになっているのである。これは、Petrarch の世界からの離脱と、形而上詩の世界への傾斜を示すものであると言えよう。

そこで、1599 年以降の修正の過程で削除されたソネットがおおむね Petrarchan conceit で充満しており、1599 年以降に於て追加されたソネットが形而上詩的な特徴を有しており、初版以降に幾度か修正を受けて留保されたソネットが、修正によってやはり形而上詩的色彩を強められたことが、おのおの分析の結果証明されるならば、Drayton の *Amours* より *Idea* に至る修正の過程が、Petrarchan poetry より Metaphysical poetry に至っているということが、実にすっきりと結論づけることができそうに見える。

しかしながら、事はそう簡単ではないのである。というのは、1594 年版 *Amours* から次の 1599 年版 *Idea* に至る過程に於て「修正」を施されたソネットを、文法や punctuation, 言葉づかい, imagery, style, ソネット構造, 等の角度から分析してみると、確かに一部には、「形而上詩的な詩風」に向って「修正」を施されたソネットもあるけれども、¹¹ Drayton は、*Amours* に於ける上述の面でのあいまいさ、不正確さ、皮相的な装飾性、等に飽き足らず、正確で簡潔で率直な文体と論理的なソネット構造を希求して、「修正」を行なったのであって、Petrarch 的な詩風から「形而上詩的な詩風」へと方向転換したのだ、というようなことを決定的にするような形跡は、ほとんど認められないのである。¹²

例えば、単にソネットの行数が 14 行でないとか、Pentameter でないために、1599 年版の *Idea* 及びそれ以降に於て、「削除」されているソネットもある。そして、陳腐で下手な Ovidian or Petrarchan conceit が目立つために、1594 年版 *Amours* から 1599 年版 *Idea* に至る過程で「削除」されているソネットもある。逆に、Petrarch 的なソネットでありながら、ずっと「保留」されている場合もあるのである。しかしながら、1599 年版 *Idea* 以降の詩集に於て、確かに、1594 年版 *Amours* のとは違った傾向が——「形而上詩的な」傾向が——見られることは、St. Clair も Tuve 女史も認めている通りである。

以上のことから、Drayton の *Amours* (1594) より *Idea* (1599 年以降の数版を含む) に至るこの sonnet sequence に対する、「削除」、「追加」、「修正」の過程は、いわゆるエリザベス朝的な特質から形而上詩的な特質への完全な方向転換という図式ではなしに、むしろ、両方の特質が共存している、エリザベス朝的な特質プラス形而上詩的な特質という図式で理解する方が正確であるように思われる。

そこで、この図式を証明するために、本稿では、まず、1594 年版 *Amours* より 1599 年版 *Idea* に至る過程で「削除」されてしまったソネットを分析し、次に、1599 年版以降に「追加」されたソネットを分析する。ただし、「修正」を施されて「留保」されたソネットに関する分析は、昨年すでに試みているので、本稿では省略する。

III

1594 年版 *Amours* には、Ovidian or Petrarchan conceit が頻繁に出てくる。これらの image は、Tuve 女史の言う、“substance” や “quality” 程度の、tenor と vehicle との間の距離の近いものばかりであり、しかもこれらは、単に amplify されているにすぎない。そして、これらの image によって Drayton は、恋人である女性を、「神聖この上ないもの」として崇拝しているのであるが、このような女性賛美の仕方は、いわゆる courtly love の伝統を受けついでいるものであり、その起源はもちろん、Spenser などのエリザベス朝詩人を經由して、Ovid にまでさかのぼられるものであろう。

例えば、1594 年版 *Amour* 5 に於ける以下のイタリック体の部分(筆者が施した)

に、この傾向は如実にあらわれている。

AMOUR. 5.

Since *holy Vestall* lawes have been neglected,
 The Gods pure fire hath been extinguisht quite:
No *Virgine* once attending on *that light*,
Nor yet *those heavenly secrets* once respected.

Till thou alone to pay *the heavens* their dutie,
 Within *the Temple of thy sacred name*,
With thine eyes kindling *that Celestial flame*,
By those *reflecting Sun-beames* of *thy beautie*.

Here *Chastity that Vestall most divine*,
 Attends *that Lampe* with eye which never sleepeth,
 The volumes of Religions lawes shee keepeth,
 Making *thy breast that sacred reliques shryne*,
Where *blessed Angels* singing day and night,
Praise him which made *that fire*, which lends *that light*.

例えば、6行目及び12行目の、女性（の胸）= Temple（shryne）という image の場合、女性（の胸）という tenor と、Temple（shryne）という vehicle との間の比較点は、「神聖である（もの）」という、両者の“quality”，及び、その“quality”を有する“substance”という事であるので、この image は、Tuve 女史の言う、Aristotle の ten categories の中の、“substance”や“quality”という論理学上の範疇に基づいて構想されたものであることが判明する。同様の事は、純粋な恋心をさしていると思われる“that Celestial flame”という metaphor にも言える。そして、8行目の、女性の美しさ = Sun-beames という image も同様である。更に、この女性の純潔を賛え

る形容辞と思われる言葉が、わずか 14 行の中に頻繁に使われているのであるが、これは「削除」されたソネット群の共通の特徴でもある。

そして、このような傾向は、1594 年版 *Amour* 23 にも見られる。

AMOUR. 23.

*Wonder of Heaven, glasse of divinitie,
Rare beauty, Natures joy, perfections Mother,
The worke of that united Trinitie,
Wherein each fayrest part excelleth other.*

*Loves Methridate, the purest of perfection,
Celestiall Image, Load-stone of desire,
The soules delight, the sences true direction,
Sunne of the world, thou hart revyving fire.*

Why should'st thou place *thy Trophies* in those eyes,
Which scorne *the honor* that is done to thee,
Or make my pen her name *imortalize*,
Who in her pride sdaynes once to looke on mee.
It is *thy heaven* within her face to dwell,
And in *thy heaven*, there onely is *my hell*.

イタリック体の部分により明らかなように、恋人を神聖この上ないものとして崇めていることを示す image 及び形容辞は、14 行全体にわたっている。そして、それらの image は、たとえ、形而上詩人が好んで用いた、“Methridate” (1. 5) とか “Load-stone” (1. 6) のような科学用語である場合でさえも、その構想上の論理の拠点は “substance” や “quality” にとどまっており、しかも、それらの image が 14 行にわたって単に amplify されるにすぎず、形而上詩の場合のように、“relation” や

“place” や “manner of doing” 等, tenor と vehicle との間の距離の遠い image が有機的に働いて、論理的に展開されるということはないのである。また、女性を賛美した後で、その女性の冷淡さに苦しむ詩人の心境を “hell” (1. 14) にたとえることは convention であって、その源はもちろん、Petrarch であろう。

しかしながら、1行目の “glasse of divinitie” という image は、Plotinus あるいは Dionyseus Areopagita のいわゆる “emanation” の概念、特に後者の「鏡の image」という、Neo-Platonism の影響を示すものではないだろうか。だとすると、この背後には、いわゆる “the great chain of being” とかあるいは “correspondence” などの概念が存在しているはずなのであり、Shakespeare 等もかぶった時代の波を、Shakespeare より一歳年上であったこの Drayton も同様にかぶったことになる。¹³

ともあれ、このように、言葉の限りをつくして恋人である女性を賛美するかと思うと、逆に、実らぬ恋に嘆く詩人自身の姿を描くという、Petrarchan sonnet のテーマは、1594年版 *Amours* から 1599年版 *Idea* 以降に至る過程に於て削除されたソネット群には、特に随所に見られるものである。

例えば、1594年版 *Amour* 34 のイタリック体の部分に注目してみよう。

AMOUR. 34.

*My fayre, looke from those turrets of thine eyes,
Into the Ocean of a troubled minde,
Where my poore soule, the Barke of sorrow lyes,
Left to the mercy of the waves and winde.*

*See where she flotes, laden with purest love,
Which those fayre Ilands of thy lookes affoord,
Desiring yet a thousand deaths to prove,
Then so to cast her Ballast over board.*

Drayton のソネットの変質

See how *her sayles* be *rent*, *her tacklings worne*,
Her Cable broke, *her surest Anchor lost*,
Her Marryners doe leave her all forlorne,
Yet how shee bends towards *that blessed Coast*.
Loe where she *drownes*, in *stormes of thy displeasure*,
Whose worthy prize should have enritcht *thy treasure*.

ここには、恋人の眼 = turrets (1. 1), 詩人の魂 = Barke (1. 3), 詩人の恋の悩み = Ocean (1. 2), 詩人の恋心 purest love = 船荷 (1. 5), 女性 (恋人) = Ilands (1. 6) 及び *that blessed Coast* (1. 12), 女性の冷淡さ = stormes (1. 13), 詩人の傷ついた心 = 難破寸前のぼろぼろの船 (11. 9—11), 等の conceit¹⁴ が登場しているが、これらの conventional conceit もやはり, “substance” や “quality” 程度の範疇に基づいて amplify されているのであり, その基盤となっているのは, いわゆる, エリザベス朝時代の analogical thinking であろう。そして又, このソネットの allegorical な面は, Spenser 的な匂いがする。ちなみに, Drayton が Spenser の影響を受けているという事は, St. Clair が指摘しているし, ¹⁵ 更に K. Tillotson もその証拠を記している。¹⁶

同様の conventional conceit は, 1594 年版 *Amour* 35 にも見られる。

AMOUR. 35.

See *chaste Diana*, where my harmles *hart*,
Rouz'd from my breast, his sure and safest *layre*,
Nor *chaste* by *hound*, nor forc'd by *Hunters arte*,
Yet see how right he comes unto my *fayre*.

See how *my Deere* comes to *thy Beauties stand*,
And there stands gazing on *those darting eyes*,
Whilst from theyr rayes by *Cupids skilfull hand*,

Into his hart the piercing Arrow flyes.

See how hee lookes upon *his bleeding wound*,
Whilst thus he panteth for his latest breath,
And looking on thee, falls upon the ground,
Smyling, as though he gloried in his death.
And wallowing in his blood, some lyfe yet laft,
His stone-cold lips doth kisse *the blessed shaft*.

恋人である女性を Diana にたとえて、狩猟の image で恋を詠うのは、Ovidian tradition であろう。おしまりのごとく、“my hart”「私の心臓」（「雄鹿」という意味を含む）とか、“chaste”「追われて」（純潔な、という意味の形容詞を連想させる）とか、“my Deere”「私の愛する人」（鹿という意味を含む）などの、二重の意味を持つ語の使用による、pun が見られる。そして、詩人の胸＝心臓（即ち、獲物）の巣、恋の手管＝*Hunters arte* という image も、Cupid の登場も、全て convention であって、Shakespeare のソネットや、*Venus and Adonis* や、*Love's Labour's Lost* 等にも見られることは、今さら指摘するまでもないことと思う。

そして、このように、女性をつれなき故に苦しみ、彼女の眼から発せられる（と当時は考えられていたのであるが）光（即ち、Cupid の放つ“piercing Arrow”）によって、詩人が bleed し、death に至らんばかりである、という、愛と死のテーマは、エリザベス朝時代の恋愛詩、特にソネットには、よく見られるものである。¹⁷ そして、このテーマには、必ずといってよいほど、「拷問」の image が登場する。

Amour 15 に、その例が見られる。

AMOUR. 15.

Now Love, if thou wilt prove a *Conqueror*,
Subdue thys *Tyrant* ever *martyring* mee,
And but appoint me for her *Tormentor*,

Drayton のソネットの変質

Then for a *Monarch* will I honour thee.

My hart shall be the *prison* for my fayre,

He *fetter* her in *chaines* of *purest love*,

My sighs shall stop the passage of the ayre:

This *punishment* the pittillesse may move.

With *teares* out of the Channels of mine eyes,

She'st quench her thirst as duly as they fall:

Kinde words unkindest meate I can devise,

My sweet, my faire, my good, my best of all.

Ile *binde* her then with *my torne-tressed haire*,

And *racke* her with *a thousand holy wishes*,

Then on a place prepared for her there,

Ile *execute* her with *a thousand kisses*.

Thus will I *crucifie my cruell shee*,

Thus Ile *plague* her which so hath *plagued mee*.

Drayton は、Cupid = Conqueror (あるいは Monarch) という image によって、Cupid をおだてて自分の味方につけると、自分を、恋人 (即ち Tyrant) を拷問にかける Tormentor に任命してくれるようにと、Cupid に懇願している。そして、Drayton の心臓 (即ち, prison) は、purest love (即ち, chains) によって恋人を捕えて、彼女に拷問を加える。これらもやはり、“substance” や “quality” 等の category に基づいて構想されている、Elizabethan imagery である。

ところで、最後の 1 行に於て、詩人は、「これほど私を悩ましてきた彼女を、私は、このようにして悩ましてやるつもりだ」と言って、それまでの詩行で述べた拷問が、実は、詩人ではなくて、恋人の方が詩人に対してしてきた仕打ちなのである、という、「どんでん返し」を見せている。このような paradoxical な手法は、Donne 等の

形而上詩によく見られるものであり、Drayton はそれを模倣したのかもしれない。しかし、このソネットは、Donne 等の paradox の手法を模倣したにしては、purest love, my sighes, my teares, holy wishes など、Petrarchan sonnet によく見られる要素が支配的であり、しかも、行数は 18 行もあって、厳密に言えば、non-sonnet でもあり、従って、この「どんでん返し」は、どうも、Donne などのような dynamic な効果を与えることには役立っていない。Drayton が、1599 年版に於て「削除」してしまったのは、そのせいかもしれない。

Petrarchan sonnet の伝統を受けついでいると思われる、“sighes” とか “teares” という言葉や、恋人である女性を神聖視していることを示す、装飾的な image や形容辞は、1594 年版 *Amours* には数多く見られるのであるが、これがそのソネットの中で余りに氾濫していて、しかも陳腐な表現にとどまっている場合には、1599 年版 *Idea* 以降では、「削除」されている訳である。その例を、以下にもう少し列挙してみよう。

Amour 16 に於ける、“vertues Idea” (1. 1), “teares” (1. 15), “sighes” (1. 16) など。この詩もやはり 18 行の non-sonnet である。

Amour 17 に於ける、“wonder” (1. 1), “my deerest thoughts” (1. 7), “her objects past perfection” (1. 6), “her perfection” (1. 11) など。

Amour 19 に於ける、“pure Idea” (1. 9), “vertues right Idea” (1. 9) など。

Amour 29 に於ける、“eternall light” (1. 2), “starre of starres” (1. 5), “fayre Planet” (1. 5), “Lampe of vertue” (1. 6), “ever shyning” (1. 6), “worlds wonder” (1. 9), “crowne of heaven” (1. 9), “glorious hand immortall” (1. 12), “blessed fayre” (1. 13), “heavenly eyes” (1. 13) など。

この他、例をあげれば限りがないので、この辺で省略しておく。

IV

次に、今度は、1594 年版 *Amours* には掲載されてはならず、1599 年版 *Idea* 以降に於て、新たに「追加挿入」されたソネット群を吟味してみよう。Drayton はもはや、

Drayton のソネットの変質

上記のような Ovidian or Petrarchan conceit の世界のみには甘んじてはいないことがわかる。

まず、1599 年版 *Idea* の巻頭の Dedication に於ける、Drayton 自身による、新しい詩作態度の表明は、この *Idea* 及びそれ以降の数版の変質を解く重要な資料となっている。彼は、女性を理想化して一筋にその美・徳を賛えたり、女性をつれなさを嘆きそれを呪うという、conventional な世界から脱して、“change” (1. 10) と “Varietie” (1. 11) を求め、“in all Humors” (1. 12) に詩の領域を広げるといふ、新しい態度を自ら宣言しているのである。

IDEA (1599)

TO THE READER OF THESE SONNETS

Into these Loves, who but for *Passion* lookes,
At this first sight, here let him lay them by,
And seeke else-where, in turning other Bookes,
Which better may his labour satisfie.
No *farre-fetch'd Sigh* shall ever wound my Brest,
Love from mine Eye a *Teare* shall never wring,
Nor in *Ah-mees my whyning Sonnets* drest,
(A *Libertine*) *fantastickly* I sing:
My Verse is the ture image of my Mind,
Ever in motion, still *desiring change*;
And as thus to *Varietie* inclin'd,
So *in all Humors* sportively I range:
My Muse is rightly of *the English straine*,
That cannot long one Fashion intertaine.

更にこのソネットは、先の 1594 年版 *Amours* に対する「自己批判」を表明してい

るとも考えられる。“Passion”だけを追求して、“farre-fetch’d Sigh”や“Teare”や“Ah-meas”という言葉によって哀れっぽく詠うのは——即ち、大陸的な convention に従うのは——もう止めて、“English straine”を引いているようなソネットを書きたいと述べているのである。

1619年版 *Idea* 2 も、新たに挿入されたソネットであるが、ここにも、女性を賛美するだけの語句は全く見られない。Drayton の主眼は、この恋愛に於て自分の心臓が殺害されたのは、自分のせいではなくて彼女のせいなのだということを、三段論法を用いて、ふざけた調子で述べる、あるいは説得することにある。もはや、自分の悲しさ等を長々と連らねることなど、彼の眼中にはないようである。

IDEA (1619). 2.

My heart was slaine, and none but you and I:
 Who should I think *the Murther* should *commit*?
 Since, but your selfe, there was no Creature by,
 But onely I, *guiltlesse* of *murth’ring* it.
 It shew it selfe; *the Verdict* on the view
 Doe quit the dead, and me not *accessarie*:
 Well, well, I feare it will be prov’d by you,
Th’evidence so great a *prooffe* doth carrie.
 But O, see see we need inquire no further,
 Upon your Lips *the scarlet drops* are found,
 And in your Eye, the Boy that did *the Murther*,
 Your Cheekes yet pale, since first he gave the Wound.
 By this I see, how-ever things be past,
 Yet *Heav’n* will still have *Murther* out at last.

ここには、Cupid = 殺人犯、Drayton の心臓 = 被害者、恋人である女性の唇からしたたる血 = 証拠、神 = 裁判官、という conceit があるが、これらは、殺人犯と被害者

と証拠と裁判官との間の、相互の“relation”が、“substance”や“quality”と共に、その構想上の論理の拠点になっているという点で、形而上詩的であると言えよう。更に、殺す者と殺される者、あるいは、裁く者と裁かれる者という関係の背後には、「能動」や「受動」という category も基礎となっていると考えられる。そして、これらの image が単に amplify されるのではなくて、互いに緊密に絡み合っている点でも、このソネットは形而上詩的であると言えよう。

同様の傾向は、1619年版 *Idea* 7 にも見られる。

IDEA (1619). 7.

Love, in a Humor, play'd the Prodigall,
And bad *my Senses* to a *solemne Feast*;
Yet more to grace *the Company* withall,
Invites *my Heart* to be *the chiefest Ghest*:
No other Drinke would serve *this Gluttons* turne,
But *precious Teares* distilling from mine Eyne,
Which with my Sighes *this Epicure* doth burne,
Quaffing Caroweses in *this costly Wine*;
Where, in his *Cups* o'rcome with foule Excesse,
Straightwayes he play's a *swagg'ring Ruffins part*,
And at *the Banquet*, in his Drunkenesse,
Slew his deare Friend, my kind and truest Heart:
A gentle warning (Friends) thus may you see,
What 'tis to keepe a *Drunkard* companie.

ここには、宴会の image がある。Love 即ち Cupid は、Prodigal (1. 1) や Glutton (1. 5), あるいは Epicure (1. 7), swagg'ring Ruffin (1. 10) という image で描かれている。Cupid が開いた宴会の客は、詩人の Senses (1. 2) 即ち五感であり、その正客は、詩人の Heart (1. 4), そして彼の precious Teares (1.

6) が宴会での costly Wine (1. 8) となっている。詩人の心臓は、Cupid にもて遊ばれた後、Cupid によって殺されてしまうのである。これらの conceit は、単に、“substance” や “quality” 等の category に基づいて構想されただけではなく、宴会での主人と客という「関係」や、招く者と招かれる者、殺す者と殺される者の間の「能動」と「受動」、そしてその「関係」等の category にも基づいて構想されているものと考えられる。これらの conceit が絡み合って、Drayton の恋わずらいの状態が、dramatic に (Donne 程ではないが)、そして自嘲的に描かれている点、形而上詩的であると言える。

V

以上はほんの数例にすぎず、分析も簡単にすまざるをえなかったが、Drayton の 1594 年出版の *Amours* より、1599 年以降数版を重ねる *Idea* に至る、様々な修正・削除・追加挿入の過程を辿ってみると、これらのソネット集に於て、Drayton が、その特徴を、Elizabethan imagery より Metaphysical imagery へと変えていこうとした意図が明らかになったことと思う。即ち、1594 年出版の最初の *Amours* には、かなりの Ovidian or Petrarchan conceit があふれていたのであるが、これに飽き足らなかった Drayton は、この種の conceit を含むかなりのソネット (約 4 割) を削除してしまい、代わりに、1599 年版 *Idea* には、それを上回る数の新しいソネットを追加挿入しているのである。しかも、1599 年版 *Idea* 以降に於て残したソネットには、何度も修正を施すという、念の入れようである。(この修正を受けたソネットの分析は論文に発表済みであるので省略した。) これらの生残ったソネット群は、構造上も緊密なものであり、もはや、image の単なる amplification ではなくて、いわゆるカタクレシスを求めるもの、即ち、形而上詩¹⁸へと変貌しているのである。しかしながら、全体としてみるならば、*Amours* より *Idea* に至る加筆修正の過程は、エリザベス朝的な特質より形而上詩的な特質への完全な方向転換としてではなくて、エリザベス朝的な特質プラス形而上詩的な特質という図式で理解した方が、all humours を志向していきたいと Drayton 自身が宣言したその意図を、より正しく理解することになるのではなかろうか。

この小論は日本英文学会北海道支部第20回大会（於北海道武蔵女子短期大学）に於て発表したものに加筆修正を施したものである。

NOTES

- 1 Cf. J. W. Lever : *The Elizabethan Love Sonnet* (Methuen, 1966).
- 2 テキストは, *The Works of Michael Drayton*. Ed. by J. W. Hebel, K. Tillotson, and B. H. Newdigate, in 5 vols. (Oxford : Blackwell, 1961).
- 3 *Publication of the Modern Language Association of America. American Bibliography for 1926-1962*(New York : Kraus Reprint Corporation, 1964).
- 4 F. Y. St. Clair, "Drayton's First Revision of his Sonnets," *Studies in Philology*, XXXVI, 1939, pp. 40-59.
- 5 R. Tuve : *Elizabethan and Metaphysical Imagery* (London : The Univ. of Chicago Press, 1947).
- 6 壹岐泰彦先生が, 『北海道英語英文学』第10号に, 「Drayton のソネットの改作とそのイメージ」という論文を載せておられる。
- 7 Cf. L. C. John : *The Elizabethan Sonnet Sequences : Studies in Conventional Conceits* (New York : Russell & Russell, 1938).
- 8 Anne Goodere であることは一般に認められている。
- 9 Tuve, *op. cit.*, p. 285.
- 10 村岡 勇先生の著になる, 『形而上詩の諸問題』(南雲堂, 1965) の pp. 12-13 その他を参照されたし。
- 11 *Amour* 6 など。
- 12 この点に関しては, 東北学院大学大学院論集『東北』第10号(1975), pp. 1-13 に於ける拙論を参照されたし。
- 13 この点に関する言及は, Hebel 編テキストの第5巻のNotesには, 全くないのである。"the great chain of being" 及び "correspondence" 等の概念に関しては, R. G. Collingwood : *The Idea of Nature* (Oxford Univ. Press, 1945) や, A. O. Lovejoy : *The Great Chain of Being* (Cambridge : Harvard Univ. Press, 1938) 等を参照されたし。
- 14 St. Clair, *op. cit.*, p.49 によると, これらは Petrarchan conceit である。
- 15 St. Clair, *op. cit.*, p. 54.
- 16 Hebel, *op. cit.*, vol. V, p. xx. ここで, このNotesの部分の筆者である K. Tillotson は, Drayton が, 自作の詩である *Endimion and Phoebe, Ideas Latmus* (1595) の終りの数行に於て, "his indebtedness to Spenser and Lodge" を認め, 更に, Daniel を "praises" しているということを指摘している。

17 Cf. Claes Schaar, "On the Motif of Death in 16th Century Sonnet Poetry," *Scripta Minora* (Lund, 1960).

18 「形而上詩」の定義に関しては、一般的に受け入れられている R. Tuve 女史の説に従った。この定義づけを問題とすると、それ自体大きな問題とならざるをえないので、別の機会に譲った次第である。ただ、この点に関しては、拙論「Elizabeth 朝詩人と形而上詩人のイメージの比較——Spenser, Shakespeare, Donne を中心に」（東北学院大学大学院論集『東北』第9号，1974年）pp. 22-31 に於ても検討している。